東　欧　―ポーランド語・チェコ語

一　ポーランド語とチェコ語

ロシヤ・東欧語学科発足まで、およびその背景

隣国ロシアの言語を学ぶ重要性については誰の目にも明らかで、ロシア語は建学当初の五つの言語の一つとなった。ところが、ロシア語以外のスラヴ語となると、学習者、研究者の数はたちまち減り、ごく一部の例外を除けば、これらの地域の文学はすべて、戦前は言わずもがな、戦後もしばらくは英語やロシア語、あるいはドイツ語やフランス語などからの重訳であった。しかしヨーロッパには、列強とか大国と呼ばれる国以外にも、長い歴史と伝統を誇り、水準の高い学問や文化をもった国がたくさんある。その好例がポーランドとチェコであり、これら二つの、ロシアとは異なるスラヴ世界の言語と文化を学ぶ必要性は、専門家の間ではかねがね指摘されてきた。その意味で本学がこれら二つの言語を、ポーランド語については大学院外国語学研究科スラヴ系言語専攻課程の「各個言語」ないし「スラヴ諸語比較研究」という授業科目の中で、チェコ語もまた大学院や学部の授業科目「言語学特殊研究」の中で、あるいは公開講座において、長年にわたって教授してきたことは特筆に値する（さらに遡れば、昭和の初期に、ステファン・ウビェンスキなる人物が東京外国語学校でポーランド語を教え、二十数名の聴講者がいた、という指摘もある）。

本学に第二、第三のスラヴ語を専攻語として設けたいという関係教官の念願は、米ソ関係の脱冷戦化に促された一九八九年以降のいわゆる東欧の変革を背景に、ようやく現実味を帯びることになる。すでにソウル五輪を目前に控えた韓国では、いまだ国交関係のない東欧諸国との経済・文化交流の拡大を期待して、八七年に韓国外国語大学がポーランド科とルーマニア科を新設、翌八八年にはチェコスロヴァキア、ハンガリー、ユーゴスラヴィア科を増設していた。こうした国際状況の変化と改革の機運に乗じて、本学が新たに二つのスラヴ語の専攻語コースを開設することができたのも、実は学内にこれらの言語の研究と教育の確かな実績があったからにほかならない。

当初、ロシヤ語学科とは別にスラヴ語学科を作る案が概算要求に提出されたが、文部省当局との折衝を重ねる中で、既存のロシヤ語学科をロシヤ・東欧語学科に改組し、その中に新たにポーランド語とチェコ語の専攻語コースが設けられることになった。従来のたこつぼ型の学科編成に逆らって、ロシヤからロシヤ・東欧へという広域化を伴ったこの改組は、その後の学部再編という大きな動きの中で眺めるなら、文字通り変革の先駆けであったと言える。現在のロシア・東欧課程の基礎はこのときすでに成立していたわけである。

ポーランド語・チェコ語専攻コースの開設と学内外の反響

一九九一年四月、大所帯となったロシヤ・東欧語学科が発足し、七六人のロシヤ語専攻（定員七五名）の学生とともにポーランド語専攻一三名、チェコ語専攻一六名（定員はそれぞれ一五名）の第一期生が入学する。彼らを迎えた教員スタッフは、専任教官が本学の言語学担当から移籍した千野栄一教授（スラヴ語学、チェコ語学・文学）と信州大学教養部から転任した石井哲士朗助教授（ロシア・ポーランド語学）の二名、ほかに非常勤講師四名（内ポーランド人とチェコ人各一名）であった（石井助教授は同年九月末までは併任扱い）。翌五月に行われた恒例の全学ボート

大会では、初出場のポーランドチームが男子覇業レースで優勝をさらった。

同年七月三日、本学四号館六階の大会議室において、ロシヤ・東欧語学科発足記念祝賀会が催された。席上、参列者を前に、ソ連、ポーランド、チェコスロヴァキアの各大使館の代表が祝辞を述べたが、その中でポーランドのパヴラク臨時代理大使が新学科の名称に言及し、「いまや東欧なるものは存在しないのだから、できれば中欧あるいはスラヴという名称にして欲しかった」という趣旨の発言をしたのが印象的であった。とはいえ、自国の言語を専攻語とする学科の誕生は、ポーランド、チェコ両国民にとっても大いなる喜びであったことは間違いない。

翌九二年一月、着任まもないリプシツ新ポーランド大使が来学して、原卓也学長にあらためてお祝いを述べ、一期生の歓迎を受けた。大使はこの時の感激を、学長宛の礼状の中で、「教室で若い学生たちがいかなる理由の故か、舌のからまるような私の母国語の習得に果敢に挑戦されている様を拝見しておりますと、彼らの学問に対する瑞々しい純粋さに触れ深い感動を覚えると同時に、うらやましさも覚えました」と書いている。大使はまた九五年四月、在京ポーランド大使館で原学長と千野教授に、日本初のポーランド語専攻コース開設の功績を称えるヴァウェンサ（ワレサ）大統領署名の功労勲章を授与した。

なお、ポーランド、チェコ両国との交流について付言すれば、ポズナンのアダム・ミツキェーヴィチ大学学長イェジ・フェドロフスキ教授が九四年八月に来学、石井助教授は九六年十月より一年間、ワルシャワ大学日本学科の客員講師を務めた。また九八年三月にはプラハのカレル大学学長カレル・マリー教授が来学し、翌年二月、本学の中嶋嶺雄学長がかの地を訪れ、カレル大学との大学間交流協定に調印した。

二　七年間の動き

教員スタッフ

教員スタッフは学年進行とともに、徐々に拡充された。ポーランド語専攻では九二年四月に東京工業大学から関口時正助教授（ポーランド文化）が、翌九三年四月には大東文化大学から小原雅俊教授（ポーランドのユダヤ人の歴史と文化）が着任。チェコ語専攻では九二年四月に金指久美子助手（スラヴ語学〈九八年四月講師昇任〉）が採用されたあと、九四年三月千野栄一教授が定年により退官。九六年四月、東京学芸大学から篠原琢講師（十九、二十世紀チェコ史）が着任した（九五年四月から一年間は併任）。

この結果、九五年四月の大講座制への移行後、ポーランド語専攻では三つの講座（言語・情報、総合文化、地域・国際）に一名ずつ教官が配置されることになったが、チェコ語専攻は総合文化講座の専任教官を欠く状態が続いている。さらに残念なことに、両専攻語とも、現在のところ外国人教師の定員が認められていない。ネイティヴ・スピーカーはポーランド語、チェコ語とも三名ずついるが（一九九八年度の場合）、すべて非常勤講師である。

専任スタッフの少ない両専攻にとって、ネイティヴ・スピーカーを含めた非常勤講師の存在はカリキュラムの充実化に不可欠であった。開設以後の七年間に出講した非常勤講師は次の通りである（順不同、敬称略）。

ポーランド語専攻――鈴木エルジベータ、石川グラジナ、鈴木輝二、井内敏夫、三井レナータ、宮島直機、泉ボグミワ、長谷見一雄、白木太一、柴理子、久山宏一、田口雅弘。

チェコ語専攻――飯島周、ダグマル・アメモリオヴァー、林忠行、広瀬佳一、千野亜矢子、中島由美、長與進、橋

卒業者数

年度＼専攻	ポーランド語（男女内訳）	チェコ語（男女内訳）
1995（平成7）年3月	6名（1：5）	8名（2：6）
1996（平成8）年3月	10名（2：8）	14名（6：8）
1997（平成9）年3月	14名（6：8）	13名（5：8）
1998（平成10）年3月	19名（7：12）	15名（4：11）
合　　計	49名（16：33）	50名（17：33）

本聡、横井雅子、立古ダニエラ、伊東一郎、岩井憲幸、村田真一、マルチナ・バラートコヴァー、三谷恵子、沼野充義、木村英明、薩摩秀登、稲野強、西成彦、長場真砂子、寺島憲治、小澤弘明。

なお現在、主専攻語の授業科目は別として、講義科目のほとんどがロシア・東欧課程の全学生を対象に開講されている。

その他

一九九五年三月、ポーランド語・チェコ語専攻の初めての卒業生を送り出した。以後、四年間の卒業者の総数は両専攻合わせて九九名。内訳は表の通りである。

大学の社会的貢献の一環として、ポーランド語・チェコ語専攻ではこれまでに二度、一般市民を対象にした公開講座を実施している。一九九三（平成五）年度は専任スタッフ全員によるリレー式講義「ポーランドとチェコの言語と文化」が、また一九九七（平成九）年度には語学講座「ポーランド語初級」が行われ、どちらも熱心な受講者を得て好評であった。

一九九四年以降、ポーランド、チェコそれぞれの在日大使館が主催あるいは後援するスピーチコンテストが毎年行われ（ポーランド語は九六年を除く）、本学の学生が積極的に参加している。学長表彰の栄誉に輝いた上位入賞者も少なくない。

この七年間に学外の多くの方々から図書の寄贈があった。とりわけ故吉上昭三・内

田莉莎子夫妻の遺族からは、二人の厖大な蔵書を本学に寄贈したい旨の申し出があり、本学はこれをありがたく受けることになった。府中への移転後には吉上文庫として広く教員・学生の閲覧に供される予定である。ちなみにポーランド文学者の吉上昭三はかつて非常勤講師として本学大学院でポーランド語を担当したことがあり、また児童文学者として活躍した内田莉莎子にはロシア語、ポーランド語、チェコ語からの数多くの翻訳作品がある。

参考資料

・「祭典のわき役さん　ソウル五輪を支える④」一九八八年七月六日付け朝日新聞朝刊
・千野榮一「チェコ語コース開設の念願かなう」一九九一年三月五日付け朝日新聞夕刊
・原卓也「客人を迎えて」月刊『現代』、講談社、一九九二年四月号
・吉上昭三「ポーランド文学と加藤朝鳥」『ポロニカ』創刊号、恒文社、一九九〇年八月